



右からプリヴェ企業再生グループ会長・松村謙三氏、洋画家・絹谷幸二氏、美術評論家・南島宏氏

《特別企画》

松村謙三賞 絹谷幸二賞

撮影・安達康介
本文構成・編集部
取材協力…すし善銀座店
写真協力…日動画廊

【画家の使命、コレクターの役割】鼎談

松村謙三（プリヴェ企業再生グループ代表取締役会長、
大阪大学 大学院 法学研究科 招聘教授）

絹谷幸二（洋画家・日本芸術院会員・独立美術協会会員）

南島宏（美術評論家・女子美術大学教授）

日本を代表する洋画家で、昨年从今年にかけて
数々の大規模な展覧会を成功させてきた絹谷幸二さん。

イタリアで学んだアフレスコ技法による、

原色を駆使した壮大な作品世界で知られ、

その作品は美術品コレクターの間でも垂涎的。

近年では、洋画の次世代作家を発掘するため、

私財を投じて「絹谷幸二賞」を創設して、美術界を賑わせた。

プリヴェ企業再生グループ代表取締役会長の松村謙三氏は、

絹谷幸二作品の「大コレクター」として知られる。

昭和会展（日動画廊主催）に林武賞のあと、

請われて松村謙三賞を設立してすでに6年目となる。

さらに自身の名前を冠した美術館の建設も予定している

稀代の大コレクター。

今回は、二人をよく知る美術評論家の南島宏氏をまじえて、
創造者とコレクター、そして美術評論家それぞれの立場から、

日本の美術の未来への展望、絹谷芸術の本質論など

縦横に語り合ってもらった。

絹谷幸二賞のきっかけは松村氏

——絹谷幸二賞の創設のいきさつについて教えてください。

絹谷 そもそもそのきっかけは、私の一大コレクターである松村さんから、絹谷幸二賞をやりましょうと言っていたことが始まりです。松村さんが「僕がスポンサーになってあげるからやりましょう」と言ってくださって、すべてが始まりました。

松村 絹谷先生はかなり躊躇されましたね。

絹谷 まだ現役の画家なのに、自分の名前がついた賞を作るなんて、どうだろうと悩みました。普通なら買ってこない大作をまとめて買ってくださる僕の最大のコレクターの松村さんが言ってくださったことだから、考えてみよう、是非やってみたいと気持ちが膨らんでいったんです。そしてかつて安井賞を主催していた毎日新聞に相談して、絹谷幸二賞が具体的にになっていったんですね。

——昭和会展の中に松村謙三賞が創設にされたいきさつについても教えてください。

松村 最初は日動画廊の社長や芸術院会員の先生方から、「林武賞がなくなったあと、松村謙三賞を出してもらえると若い画家たちの励みになるので、是非、賞を作ってほしい」とお願いされました。そのときは自分の名前の賞はちょっと恥ずかしいのでお断りし、そのかわり日動画廊の80周年だったので、日動画廊80周年の特別賞、100万円を2本出してあげました。翌年、「賞をあげた若手たちが凄く喜んで、作風も非常によくなって



富嶽龍神飛翔 259.1×387.8cm 松村謙三コレクション

芸術には、人の命を守る力もあります。 望まれるのはそれを支える愛なのです。——絹谷幸二

いて、賞の力は大きい、是非松村さん、賞を作ってください」と審査員のいろいろな方から言われて、「松村謙三賞」を創設することを承諾しました。「松村謙三賞」は林武賞のあと、昭和会賞と同額の200万円の賞としてすでに6年続いています。回を重ねるごとに賞をあげた若手の絵が良くなってきています。賞をあげた作家たちも感謝の手紙を送って来たり、「人生が変わりました」という言葉を何人からも直接言われる機会があり、賞を続けていってあげようという気持ちです。

——ところで絹谷幸二賞の創設の「井戸を掘った人」である松村さんと、絹谷先生との出会いをお聞きかせください。

松村 これまでに3つの会社を上場させてきましたが、3つ目の会社を上場させるちょっと前の頃、今でも鮮明に憶えています。日動画廊の常設展に招かれて行ってみたところ、富士山を赤く描いた20号ほどの絵がありました。ハツとする絵で、その作品しか目に入らなかった。こういう絵を描く画家が日本にいたんだと感動しました。「この絵を買おうよ」と購入を即決しました。「自分の肖像画を描かせたいと思っていた。この画家に会ってみたい」と話したら、場を設定してくれて会食したことを憶えています。画廊の事前の話では絹谷先生は肖像画はめったに描かれないということで

したが、私と意気投合して、肖像画を描いてくれることになったんですよ。

南篤 その20号の富士山の絵を見て、風景ではなく自分の顔を描いてもらおうと思ったんですか？

松村 そうです。この画家は世界的な画家になると直観的に思いました。絹谷幸二という画家の絵を体系的に集めようと決めたんですよ。

絹谷 肖像画というのは普通、すました表情を描くものです。ところが松村さんは怒った自分を描いてくれたって言うんです。

松村 自分の鬼の部分を描いてくれ、と言ったんですよ。「仏」の部分ではなくて、経営者としての「鬼」の部分を描いてくれと言ったら、絹谷先生は「怒った顔してくれ」と言う。無理ですよ！すぐには怒れない。

絹谷 そんな注文をされる方はまずいませぬね。若く描いてくれとか、頭の角度をこうしてくれっていうのならわかりますけど。困りました。

賞は人生を変える

南篤 「松村謙三賞」は画家の人生を大きく変えていますね。コレクター目線の賞はほかにありませんし。

絹谷 30歳を過ぎたりして子供ができたりすると、褒めてもらうだけでは食べていけないんですね。

た甲斐があつたと思いました。

南篤 コレクターというより、パトロンそのものですね。僕はバロン松村と呼びたいくらいですね。

絹谷 素晴らしいですね。日本では名誉と経済がなかなか同時に得られません。芸術とは高貴なもので、食べることは別にしてしまう。でも本当はそうじゃない。芸術とは、本当に困った時に、食べるものがなくなった時に、命を助けてくれるものなんです。これがアートの大きな使命だということをお忘れしているんです。私はこの国には文化庁ではなくて、文部科学省だけではなくて、経済産業省など各省庁から職員を集めた文化省が必要だと思えますね。

南篤 いまの発言はとても重要で、本格的な芸術文化立国のためにも、安倍総理にぜひ聞いてもらいたかったですね。

——絹谷先生は第17回安井賞を受賞されています。それが画家人生を変えたとか。

絹谷 安井賞をもらったときのことは、今でも憶えています。私は当時、独立美術協会の運営委員でした。当時は画商がバックについて、具象絵画の画家が有力候補の条件でしたから自分は無理だと思っていました。私自身が画家を推薦する委員だったので、獲れそうな人を推薦したんです。いかにも画商が喜びそうな具象の人を選びました。ところがそれは別に美術評論家連盟が私を賞候補に推薦してくれた。結果は、私が安井賞を頂くことになったんです。

妻と抱き合って喜びましたよ。美術界の芥川賞みたいなものですから、安井賞作家となると画商



きぬたに・こうじ

1943年奈良県奈良市生まれ。66年東京芸術大学絵画科油画卒業、大橋賞を受賞、第34回独立展、独立賞受賞（同67年）。68年同大学院修了。独立美術協会会員に推挙。71年渡伊レヴェネツィア・アカデミア入学。アフレスコ画を研究（～73年）。74年第17回安井賞受賞。77年昭和52年度文化庁派遣芸術家在外研修員として渡欧（～78年）。87年2001年第57回日本芸術院賞受賞、日本芸術院会員に任命。09年絹谷幸二賞が毎日新聞社主催で創設される。現在、日本芸術院会員、独立美術協会会員、東京芸術大学名誉教授、大阪芸術大学教授。

松村さんは昭和会展という歴史ある賞の中に、もう一つ賞を作ったその心意気が素晴らしい。賞金が200万円。若い画家は作品を売って200万円稼ごうと思うと、その数倍の値段分を売らなきゃいけないということを知らないから、本当のありがたみ分かるまでに時間がかかるんですね。**松村** 僕は、この賞を単に賞金を提供して終わりにしたくないんですよ。「松村謙三賞」をとった画家に関しては、これまで全員、日動画廊が個展を開催してくれていて、実際にその展覧会で作品が売れていきます。芥川賞や直木賞でも、受賞作品を掲載した「文藝春秋」が売れることでその作家が有名になり、多くの読者を獲得しています。賞をあげて「以上、終わり」ではなく、その後のバックアップが大切だと思うんです。

さんも注目してくれる。それだけ大きな節目なんですよ。今でも私は、そのおかげで画家が続けられると思っっています。賞というのは、それくらい画家の人生にとって大きなものなんです。

その前に頂いた独立美術協会の独立賞も大きな転機でした。イタリアに行く準備をしていたんですが、独立美術協会では、賞をとって会員になると、翌年から審査員になるんです。なんとしてでも留学前に独立賞をとっておかないと、留学から戻ってきたときに後輩に審査される可能性がありますから。実際、そんな理由で辞めていく人も多くいました。独立賞は獲りたいと思って、血を吐きながら獲った賞。安井賞は逆に、いわば天から降ってきた賞。いずれにしても賞は人生を左右するんですよ。

松村 当時の生活はどんな風でした？

絹谷 貧しかったですよ。ペネチアでは、市場に行ってもイワシばかり目にしていました。そのつぎに目が行くのがシヤコ。ロブスターを売っているのを知ったのは、ずいぶん後のこと。日本に帰ってからもちっちゃいアパート暮らしでしたから、安井賞の20万円という賞金は大きかったですね。ありがたかった。

松村 その経験をいまでも忘れずに憶えているんですね。

絹谷 でも、受賞というのは、一つのスタートなんです。それをゴールだと勘違いしてダメになる人も多い。藝大に入ってそれで終わってしまう人もいれば、独立美術協会の会員になって終わってしまう人もいます。ゴールについてと思っ



天空ガンダーラ黙想 162×130.3cm (100F) 松村謙三コレクション



天空ガンダーラ追想 162×130.3cm (100F) 松村謙三コレクション

九州出身のある女の子は、親や親戚から絵なんて辞めて早く帰ってこいって言われ続けていたそうです。ところが、昭和会展で松村謙三特別賞を獲って、月刊美術に大きく掲載され、しかも画壇の有名な先生と一緒に写真に納まったところが掲載された。その本を実家に送ったら、親御さんが感激して掲載誌を何十冊も買って親類縁者に配ったそうです。その上、東京の家賃も出してあげるからもつと頑張るように励まされたそうです。涙ぐんで「松村さんの賞を頂いて、本当に人生変わりました」と言われたときには、本当に賞を出し



花二輪 90×116.7cm(50F) 1997年 松村謙三コレクション

とはその絵の模写になっていく。受賞という榮譽も、それと同じ危険を孕んでいます。だから、受賞者としての賞味期限は3年から4年くらい。その間に自分をイノベーションしていった欲しい。賞を取ることで広がった世界を、さらに広げていった欲しいと思います。

「闇」こそ絹谷芸術の本質

——絹谷芸術はなぜこれほど人の心を捉えるのでしょうか？

絹谷 色彩もいっぱい使っているんで、元気が出るって言ってますね。ベネチアに行くと、家からなにか色がついてるでしょ。そしてよく歌っている。アモーレ、カンターレ。元気で、朗らかで、楽しく暮らしている。食べ物だって赤

ら絹谷幸二とはそういう概念から飛び出した存在だからです。先生ご自身はどう捉えられようと、そういわせていらつしやるだけで、本質はそうではないと思います。当たっているかどうかは、わかりませんが。

絹谷 当たってますね。

南薫 絹谷芸術の中にもっといろんなことを読み取れる、もっといろんなことを享受すべき表現者なんだということをおぼろげに私たちは気付かないといけない。

絹谷 闇と光、男と女、水と油、共産主義と自由主義など相反するものはたくさんありますが、それはみな一つのものの別の部分なのです。文殊菩薩は片手に蓮の花を、反対の手に刀をもっています。そういう視点でものを見たいと常に思っている。

文殊菩薩に説教したのが維摩さんですね。興福寺に帽子をかぶった像がある、あの維摩です。この人は在家の人で、町の中で解脱した人物。維摩さんは文殊に、「お前は山の上に行つて修行して、解脱したそうだが、それではただお前ひとりだけが嬉しだけじゃないか」って問答を吹っ掛けるんですね。私はそういう見方がすごく好きなんです。私は光と闇を双眼で同時に見たいし、絵を描くというのはいささかと思つている。白い石膏像をデッサンするのに、黒い木炭で描くのは矛盾がありますね。

維摩の物語である維摩経では、二つの概念は一

いものを食べると元気になるし、青い野菜は体調を整える。それと同じで、目から色を食べれば元気になるんです。ですから色彩を思う存分使った方がいいと思つたんです。

日本人は本来もっと元気があつたんですね。それが徳川政権300年の間に色彩が奪われたんです。その前の信長や秀吉の時代は色彩に満ちています。徳川家も日光東照宮だったり、大奥の金襴緞子だったり。狩野派の金銀の絵だったり、派手なものです。ところが庶民に対しては地味な暮らしを押し付けたんですね。いまでも北朝鮮などの軍事政権は色彩を抑えてしまおうでしょう。軍服を着させて、ほとんど同じ顔色にしてしまおう。そのことにヨーロッパで気づいたんです。日本人もこういう資質を取り戻さないと元気にならない。そのためには色彩と歌を取り戻さないといいけないと。

松村 これについては、美術評論家である南薫先生の意見を伺いたい。

南薫 先生は展覧会をたくさんされていきますし、数多くの評論家が絹谷芸術についての論評をされているけども、実は先生はそれに一度も満足されていないだろうと思つています。先生がおっしゃったことを後追いで何かを書いたり言ったりしているのがほとんど。しかし、今先生がベネチアを例にしておっしゃったように、あの光には実は裏側に闇があつて、そこが重要なところだと私は思います。みなさん色彩と光を前にして、わーっすごいって言うけども、それを可能にしていく闇、解決不可能な闇に、先生の絵は根っこを張っているはず。ですから、もし一言で絹谷幸二

つものの一歩であるということを言っている。そしてその行く先は「空」であるといっています。これが奈良仏教の深いところで、善も悪も違うものではないのです。共産主義国であるはずの中国が今やっていることは、自由主義国以上のこと。その一方で日本は銀行を救いましたけど、これは非常に共産主義的です。

普通は絵は明るいのが好まれるし、私もそれを描いていけば、幸せな気分ではいられます。しかし光と影は常に同体。そういうことを制作を通して伝えたいのです。

南薫 あの明るい作品でも、極彩色自体も何かの影だと私は思います。絹谷先生が生まれ育った奈良はかつて国際都市でした。イラン、インド、中国、朝鮮といった世界中の文化のエッセンスが伝わり、それが東大寺の盧舎那仏へとつながっています。奈良の得体のしれないエネルギーの遺伝子を現代に引き継いだのが、彫刻家の井上武吉さんと絹谷先生だと思います。

絹谷 私と武吉さんは、伊豆半島に共同アトリエを建てようとしていたんですよ。ところが武吉さんが亡くなってしまったんです。あの方も非常に深いところを見ていたんだと思います。

待たれる絹谷幸二論

南薫 先ほど闇と光、男と女など、相反するものは実は一つのものの別の部分だというお話があり

という画家を言い表すとすると、「鳥海青児の最後の弟子であることを自認する画家」と言いたい。そこには鳥海青児のあの「闇」があるんです。

絹谷 その通りです。そこまで見通されているとは……。

南薫 確かにベネチアで光を見たことは一つの様式変換ではあると思いますが、もともと先生のの中にあつたものが出てきただけ。もし私が先生の作品一点をあげるとすると、『青の風跡』をあげたい。それはなぜかというところ、ここにバルテュスを感じるからです。兄はピエール・クロソウスキーという詩人で画家です。ポップアートの源流の一つは、グロウンス派というキリスト教の亜流というか、秘密教であるというのが私の意見なんですけど、これも関係しています。エロスの根源に繋がっている。時代はズレますけども、ポップアートに共通する闇の部分先生は持っているのです。

松村会長が何故、なんの予備知識もなしに絹谷作品を見て、惚れこんだかというところ、松村会長自身もまた厳しい世界を生きてきた人だからだと思います。

松村 先生の暗い作品もずいぶん買ってますね。犬が吠えしている作品「花二輪」を買ったときは、先生が「この絵は、難しい絵なんです。これを買うなんて！」って言ってましたね。

南薫 先生は独立美術協会の重鎮で、日本の洋画壇の偉い先生と一般には捉えられていますけど、それは窮屈でしょう。もっと言えば、現代美術の作家として捉えられることも窮屈なはず。なぜな

ました。なかでも絹谷芸術の深い部分には、生と死という問題が非常に大きくかかわっているように思います。セザンヌのサント・ヴィクトワール山が、石灰岩のまきに死の山であるにも関わらず、朝日が当たれば真っ青になり、夕焼けは真っ赤に変わるのと同じように、富士に代表される絹谷先生の風景画も、そういった次元で論じられるべきです。

絹谷 風景と人物は、別々の素材だと思うでしょう。しかし、富士山の噴火した鉄分が川を伝って駿河湾に入り、それがプランクトン、海老、鯛というように赤いものが体に入ってくる。それを私たちが摂りこんでいます。僕らの皮膚をめくると、体の組成は富士山と同じなんですよ。

南薫 20世紀の初めに、物理学者が発見したのは、あらゆる物質の真ん中にあるのが、空だということでした。僕らは空からできています。奈良仏教でいわれた「空」と同じ洞察に至ったのです。

絹谷 深いですね。それはフレスコ画とも重なっ



まつむら・けんぞう
ブリヴェ企業再生グループ株式会社代表取締役会長。他に大阪大学 大学院 法学研究科 招聘教授。大阪大学 知的財産センター招聘教授、経済同友会経済・金融委員会委員も。「松村謙三美術館」を清里にオープン予定。

賞金を出すだけでは意味がない。芸術家を育てるには、その後のバックアップが大切なのです。

——松村謙三

てくる問題です。プレスコ画から油絵、さらにアクリル画になるにしたがって、こうした認識が薄くなっていると感じます。

南 薫 油絵ってというのは、悠長に描けるんです。しかしプレスコ画は、絵の具が乾かないうちに描かなければならないわけです。おそらくそれは死が後ろから追いかけてくるっていう感じなんじゃないでしょうか。死が完璧に死にならないうちに描け、と。そして死が板についた瞬間に作品が成り立つ。追いかけてくる死の緊張感が結集したものとして絵画が生まれる。

絹谷 ここまで、感じてくれる人は、日本広しといえども、いませんね。

南 薫 絹谷作品は、我々が死につつある存在であるにもかかわらず、その緊張感が薄くなっていることを如実に示してくれています。

絹谷 花が美しいのはそのため。花は一瞬で枯れ



みなみしま・ひろし
美術評論家。女子美術大学教授。国際美術評論家連盟理事、全国美術館会議理事、熊本市現代美術館館長、ベネチアビエンナーレ2009日本館コミッショナーなどを歴任。昭和会賞をはじめ、数多くの展覧会の審査員を務める。

てしまいうからこそ美しい。そしてだれも死からは逃れられないのです。

松村 私も南薫先生に同感ですよ。

南 薫 松村会長と出会わなかったら、私もこんな風には言えなかったと思います。

絹谷 是非、先生に絹谷幸二論を書いていただくかないとなりませんね。

芸術は命を救う、それを支えるのは松村さんのようなコレクターの愛

——先生が考える画家の使命とは？

絹谷 絵描きは社会に対して何も責任を負わなくていい。僕の絵を見て気が違っても、なんら責任を負わなくていい。他の世界で負わなければならない責任が、私たちにはないのです。

南 薫 クリスト（1935年ブルガリア生まれの美術家。妻のフランス人美術家、ジャンヌ・クロードとともに活動）も全く同じことを言っています。大きなプロジェクトをやっても、それは社会のためなんかではない。美術の歴史のためでもない。私がやりたいからやっている。クロードと二人でやりたいから、やっている。それが芸術家の存在理由なんだ、マスコミや評論家は勝手に理由をつけるけど、それは関係ない、と。しかしそれが逆説的に、ものすごい役に立っているのです。

「闇」を見過ごしてはなりません。鳥海青兎から受け継いだ「闇」こそ絹谷芸術の本質のひとつなのですから。——南 薫 宏

ないのです。

南 薫 その感性が、確認しあえる世界になってほしい。

絹谷 そうなんです。そして本当の意味の芸術の理解者とは、芸術を鑑賞するだけではなく、芸術を育てていく人。つまり松村さんのような人物なんです。それが本来の意味でのパトロネージなのです。松村さんは「松村謙三賞」を作られて芸術家を支援して増やそうとされている。これほど愛に満ちた行為はありません。

松村 僕は、少なくとも人の10倍くらいの愛情はもっているつもりですよ。

絹谷 そう思いますね。パトロネージというのは、そういう形の愛情の注ぎ方なのです。



アンセルモ氏の肖像 80.3×100cm(40F)
1973年 第17回 安井賞受賞 東京国立近代美術館蔵

欲しいのは命を削って描く大作

南 薫 しかし凄いコレクターの登場に、先生もさぞかし驚かれたのでは？

絹谷 自宅や倉庫の絵をすべて買う勢いでこれを買ったからね。

松村 先生のご自宅に行くと、大きな傑作が飾ってあるんですよ。「これ買いましょう」というと、先生は「ありがたい」という表情をされるんですけど、奥様は「この絵は売らないでほしい」とよく言っていましたね。

絹谷 400号の大作です。まさか買ってくれとは思いませんよ。壁を壊すか、巨大な重機でもなければ建物に入らないような大作を買うなんて。



黄泉津比良坂（伊邪那岐・伊邪那美）2012年

絹谷 その通り。

南 薫 私は学生にこんな話をします。例えば、なぜこの時間に光があるかという、どこかにこの時間か一生懸命ピアノを弾いている人がいるから、この光があるのです。世界のどこかの片隅で、何度やっても落選ばかりする絵描きがいる、その人が絵を描かなければならないから、この光がもっている。そういった芸術家の犠牲の上にあるのが私たちの暮らしたと。

絹谷 建築ならば、雨がしのげるとか、壊れないで住み続けられるとか、目的がありますけども、絵描きの場合それはありません。絵描きには制約がないという意味でも、何かの手段ではないという意味でも自由なんです。それにもかかわらず、人の命を救うことができるものなのです。

私は昭和18年生まれですから、奈良に生まれていなければ、死んでいたかもしれない。奈良も京都もパリも、芸術品があったから攻撃を免れたんです。芸術がその人たちを救った。芸術品、美術品は笑もあり、名誉もあり、華もある。そして人の命も守るんです。だからこそ決して踏みにじれないものであり、育てていかなければいけないものなんです。いま人間の命がとも安くなっています。愛情がないというか。そういう時代だからこそ、芸術家が頑張らなければいけ

南 薫 そんな大作を買おうという人はまずいないので、先生も慣れてなかったんでしょう。

——最後に、あらためて画家にとつて、コレクターとは？

絹谷 一番ありがたい存在です。松村さんのようなコレクターがいてくださるおかげで、絵描きは自由に絵が描けるわけです。たくさんでなくていいから、こういう志のある方が必要なんです。絵描きからすると、すべての人に気に入られようとすると、平均点をとれる絵を描くことになる。でもそうじゃなくて、私に惚れこんで下さってるコレクターの方がいらして、定期的に買ってくだされば、作品も散らばらないし、描く方も思う存分に絵が描けるんですね。

松村 先生は僕に絵を買ってほしいと強く望んでいたけど、奥様や家族の方は「この絵は売らないでほしい」という表情をされたこともたびたびでしたね。龍を描いた400号の作品も、ご息の幸太さんが「ある夜、アトリエを見に行ったら、父がこの絵の前に倒れこんでいたんです。父が命を削って描いている絵なんだと思いました」と言っていました。

絹谷 松村さんには、これからも末永くお付き合いをお願いします。

——本日は、とても有意義なお話をありがとうございました。